羅須セミナー第 6 期第 7 回　　『オルタナティブ社会』論のポイント整理　　2022/04/16

話者：半田　正樹

①半田報告（第 1 回）から

［議論の前提］

現代資本主義社会の現状（＝**臨界点に達した資本主義**）

＝特殊歴史的社会として「存立」する条件（必要＆十分条件）の消滅（化）

⇒　修正/改良　VS. 代替社会

(liberal)　　(left)

必要条件：旧社会の解体・原蓄
十分条件：経済原則の充足

・市場至上主義の瀰漫（含国家、家族）・経済の金融化

・労働力商品化の「機能不全」

（人口減少/人口爆発、雇用構造流動化：非正規雇用の増大・派遣労働・労働基本権の空洞化・Great Assignment　etc.）

・自然・生態系の“欠壊”

cf.（平山報告）　1970 年代『現代資本主義の運命』（大内力）etc.

オルタナティブ社会

接近のための基軸

＊社会編成の 3 原理（共同体的・強制的・市場経済的）

＊資本にとっての次元の異なる 2 つの制約　（cf.斎藤幸平の所説にヒントを得て）

⇒　労働力　と　自然　　＊liberal を相対化する視点

➡　オルタナティブ社会は「農」と「工」の本質的差異を読み込んだ社会

◎　生物共同体としての生態系をプラットフォーム（土台）とし、「農」を基礎としつつ「工」がそれと連関する構造。

[地域循環型社会]

②田中報告（第 2～3 回）から

マルクスのオルタナティブ論

クロノロジカルに確認すると

経哲草稿期（1844）　疎外態の超克社会（疎外された労働の止揚）

ド・イデ期(1845-46)　頭脳労働と肉体労働の統一・分業の止揚

マニュフェスト期　階級的差別の消滅社会・階級全体の廃絶社会

（1848）　都市と農村区分の廃止

経済学批判期　人間社会の「本史」（←ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、・・この（社会的生産過程の）敵対的関係の解決のための物質的諸条件をもつくりだす）

(1857-58)

『資本論』(期)

第1巻　初版（序文）　資本主義発展の一律的発展法則→ポスト資本主義の展望
（1867）

第1巻　第24章　第7節　「否定の否定」論としての未来社会の把握
自己労働に基づく個人的所有→社会的生産と私的所有→種々の共同占有を基礎とする個人的所有

第3巻　第48章　必然性の領域（国）から自由の領域（国）へ
（1865）

・必然の領域（国）の彼岸において、自己目的として行なわれる人間の力の発展が、真の自由の領域(国)が、――といっても、かの必然の領域(国)を基礎としてのみ開花しうる自由の領域（国）が、――はじまる。労働日の短縮は根本的条件である。

ゴータ綱領批判期　「各人は能力に応じて働き、労働に応じて受け取る」から
（1875）　「各人は能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」へ

ザスーリチへの手紙期　ポスト資本主義の出発点としての「農村共同体」
（1881）

党宣言　ドイツ語版序文　同上趣旨
（1882）

［追記］(by 半田)

フランスの内乱(1871)

・コミューンは、代議体ではなく、執行権であって、同時に立法権を兼ねた、行動体であった（岩波文庫、p.95）

・コミューンは、本質的に労働者階級の政府であり、所有階級に対する生産階級の闘争の所産であり、そのもとで労働の経済的解放を達成し得べき、ついに発見された政治形態であった（同、p.101）。**[cf.共同体・中間勢力]**

ただし、

Enthüllungen über den Kommunistenprozess zu Köln,(1873)では、

・「労働者は・・国家権力の手中に強制力をもっとも断固として集中するように努めなければらぬ。<u>共同体の自由とか自治などにかんする民主主義的おしゃべりにまどわされてはならない</u>。」(H.アレント『革命について』ちくま文庫、p.453　に引用されている)

③平山報告(第4～6回)から

オルタナティブの諸説(1)

・レイドロウ『西暦 2000 年における協同組合』(1980) →「協同組合地域社会」

・日本社会党 (1980 年代)　「新宣言」(「協同・連帯」「中間組織」etc.)

議論の基軸 ➡ 労働力商品の止揚によるコミュニティの形成

(**協同組合地域社会**の形成)

[中間団体・中間組織＝共同体]

(平山的アソシエーションの形成①)「生活日常における実践」

・協同組合型任意団体「**アソシエーション** A・ダルマ舎」

オルタナティブの諸説(2)

・青木孝平　「自我への妄執の無根拠性の根源的暴露」↔アソシエーションの議論

(cf.「負荷なき自我」=サンデルによるロールズ[リベラル派]の個人観批判のターム)

＊オルタナティブの可能性＝不可侵の無限者としての実践者 (唯一者)

・佐藤優　「資本主義のオルタナティブの不可能性」

「次善の試み＝非商品経済的関係の部分的創出・中間団体の形成」

・柄谷行人　交換様式を視軸とする社会構成体の把握

交換様式　A 贈与・互酬　B 支配と保護　C 商品交換

→ オルタナティブ社会 D＝A への高次的回帰

＊具体相におけるアソシエーションの形成

(ただし、カントの「統整的理念」を自覚しつつ)

・斎藤幸平　マルクスの「オルタナティブ社会像」

→ 共同体原理＝「原古的な類型のより高次の形態である集団的な生産および領有への復帰」(晩期マルクス的視座)

→ 「人々が生産手段を自律的・水平的に共同管理する〈コモン〉」

→ 「資本の無限の価値増殖的生産に替わり、自然の循環に合わせた生産が可能となるように、労働の領域を抜本的に変革する」＝「肝心なのは労働と生産の変革」

(平山的アソシエーションの形成②) [アソシエーションの形成による**オルタナティブな地域社会**]

・「仙台・羅須地人協会」＝種々の**アソシエーション**をつなぐプラットフォーム

経済学的・社会思想的バックボーン

⇒ 大内秀明　資本主義の基本矛盾＝**労働力商品化の矛盾の止揚**

(共同体社会主義)　・土地、自然と結びつく共同体を基底とするオルタナティブ社会の構想

◎**「労働力商品化」が呈する諸問題＝止揚における要諦** (by 福留久大)

(1)商品の販売困難性―雇用の不安定性・失業の危機

(2)賃金決定の他律性

(3)労働の非自立性・非自律性　以上

次回 (第 8 回) は、オルタナティブの 1 つのかたち＝**「地域循環型社会」(試論)** について.